

## 岩手県野田村の支援活動報告（2011年5月25日）

弘前大学ボランティアセンターの活動も、通算 8 回目になりました。今回初めて参加した立場から、報告をまとめてみたいと思います。

この日の参加者は、学生 11 名、教員、2 名、市民 18 名の計 31 名（うち男性 15 名、女性 16 名）と、すこし学生さんが少ない編成だったようです。私も含めて、9 名が初めての参加者でした。車内では恒例の自己紹介とオリエンテーション、それから、「幸せ運べるように」の合唱があり、休憩 2 回をはさんで、バスは 9 時頃に野田村に到着しました。



休憩所での集合写真



班分け・準備の様子

この日は、「物資仕分け班」（女性 6 名）、「個人宅の清掃のお手伝い班」（女性 4 名）、「個人宅清掃（午後から物資仕分け）班」（男性 3 名、女性 3 名）というグループに分かれて活動を行いました。これまでの経験者の方が班長となって指揮を執るので心強い限りです。

私が入った物資仕分け班では、野田村に短期間出向されている北海道留萌市、様似市の職員の方と一緒に、個人や団体から送られてきた「食器」の仕分け作業に取り組みました。まずは、新聞紙にくるまれた食器を段ボールから開梱して種類やサイズごとに並べていきます。温かいメッセージが添えられた手作りのコップなどもよく見かけました。時折、バスケットと一枚の紙を片手に、「急須はありませんか」と尋ねてくる人がやってきます。並べた急須は、すぐに売り切れてしまいました。午後になってようやく全体の仕組みが分かってきたのですが、一方では送られてきた物資を種類ごとに分類していく、他方では住民の方から欲しいと依頼があったリストを片手に、品物（例：皿 3 枚、毛布 2 枚、等）をバスケットに集めていく作業が進められていたのです。

難しいのが、送られてきた物資とニーズのある品物との間に、時々ギャップが見られる点でした。先ほど述べたように、急須は大人気だけでも支援物資の中に入っていないので、渡すことができない、逆に茶わん蒸し用の食器があまりに多く届いていて置き場所に困る、といった事態が起こっていました。（ニーズがあるけれど足らなかった品物は、他に、片手

鍋、どんぶり、プラスチックのコップなど)。一緒に作業をした市民の方からの感想にもあった通り、現地が日常生活に戻りつつあることを踏まえた上で、本当に必要なものを届けることが大事だと感じました。



**食器の仕分け（急須がない！）**



**積まれた救援物資**

さて、今回の新しい試みとして、野田村から少し離れた下安家（しもあつか）という集落からの支援依頼を受けて、野田村での作業班と別に 15 人のグループがそちらに向かいました。作道先生の報告をお聞きしたところ、下安家（しもあつか）では、畑の石・瓦礫を撤去する作業に協力し、木の枝や砂利をどんどん袋詰めしていく重労働だったようです。このように、支援が必要だけれども要請が拾いにくい小さな集落は、まだまだ色々なところに点在しているのでしょうか。下安家（しもあつか）班の参加者からは、「きれいな川の中にまだ瓦礫が残っており、この川をきれいにするまで活動を続けていきたい」という感想も寄せられました。



**畑の残土集め**



**大黒柱を動かす**

帰りのバスの報告会では、初めて参加された方からも、また参加したいという声が多く出てきました。私にとっては、被災地がじょじょに「非日常」から「日常」へと変化しつつある中、ボランティア活動の形や課題も変わりつつあることを感じた一日でした。

（担当：日比野愛子）